

さそりの火

外国語学部
英語英文学科2年
藤間 渚

「さそり座に憧れる。」

放課後の理科室、そっときみが呟いた。

手元の文庫本には、見覚えのある題名。

いつか読んだけれど、もう記憶の海の遠い所。

「きみは、何か悪いことをしたの」

林檎を象った葉を挟んで、ぱたりと音が立てられた。

青紫に腫れ上がった頬、きみは静かに笑っている。

「みんな罪人だよ。生まれてから、死ぬまでずっと。」

食べるから。競うから。蹴落とすから。

人に至っては、一番初めに食べてしまったから。

曰く、誰もが生まれてしまった罪人らしい。

「なら、なぜきみだけが灼かれるの」

「救われないから。」

わかっていないな。

そう言いたげに、歪む口もと。

「生きるだけで罪なんだ。何かを殺し、獲らなきゃならない。」

おもむろに立ち上がり、床の鞆を拾い上げるきみ。

拍子に垂れた髪の間から、覗いた首筋のガーゼ。

思わず、目を反らした。

「ならいつそ、燃えて誰かの灯りになりたい。」

「何も害さなければ、綺麗な星の炎になれたなら、

きっと誰も責めないでしょう。」

「だから身勝手に、こんな世界を抜け出したいの。」

やさしいね

あの日、そんな言葉ひとつ、声に変えることは出来

なかった。

あれから幾日、幾年が経った。

帰りの電車、冷たい人の温もりに押されながら、と

きどき車窓を覗く。

いま、きみは何処にいるのだろう。

この煌びやかな街中の光に、密かに混ざっていない

だろうか。

それとも南の空の低い所で、いまは誰かを照らして

いるのだろうか。

あの空の果て、この電車の届かないところで灼かれ

続けているのだろうか。

この街では、空が見えない。

きみの灯りは、うるさい街の電飾で隠されてしまう。

せめて、私は忘れないよ

アンタレスの方を睨んで、ぼつりと呟いた。

救われないね

吐き出せなかった一言が、いまでも心臓の辺りに焦げ付いている。

『さそりの火』コメント

『銀河鉄道の夜』における「蠍の火」のエピソード、これが何とも美しく綺麗な話です。

あるところに、虫を食べて毎日を生きる蠍がいました。

ある日、そんな彼は捕食される側に回ります。イタチ

に追われ、逃げ出した矢先、不運にも井戸に落ちてしま

った蠍は、今まで自分がどんなに生を奪ってきたか。

それなのに、この様は何たるかを猛省します。そうして

神に自分の命を「みんなの幸いの為に使う」よう願った

蠍は、いまでも星の海で暗闇を照らしているのです。

『よだかの星』などでも見られるように、賢治の作品

では、食物連鎖の悲劇から逃れる為に星になる流れが

見られます。とても優しいことに思われますが、皆様

はどう思われるでしょうか。

確かに、蠍は生きものを殺して生きていました。しか

し、それは他の生物だって同じです。蠍という生物が、

毒があるから悪者に見えるという節もあるでしょう

が、僕にはこの蠍の毒が、人間にも共通する所がある

ように思えてならないのです。